

## 審査の結果の要旨

氏名 倉田 剛

本論文は、ボルツァーノの影響のもと、ブレンターノを祖として、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、広い意味でのオーストリアの地に生まれた哲学理論の総体を「オーストリア哲学」と名づけて再構成し、その哲学的的意義と現代哲学における可能性を、「現代オントロジー」という観点から考察した意欲的な論考である。

論者言うところの「オーストリア哲学」は、現代哲学の主潮流である現象学や分析哲学の起源となつたにもかかわらず、これまで正当な評価を受けてこなかった。そこで論者は、現代哲学へのオーストリア哲学の最大の貢献と考えられる「存在論」ないし「形而上学」の観点から、とりわけ「命題的对象」、「モメント」、「非存在者」という3つのトピックを取り上げてオーストリア哲学を再構成し、その評価を試みようとする。

第1部「命題的对象の理論」では、現代オントロジーの命題的对象論を概観した上で、そのルーツがオーストリア哲学に探られ、ボルツァーノの「命題自体」という概念が、いかにしてオーストリア哲学の中で受容・変様され、「事態」という新たなカテゴリーを生み出していったかが、マイノングの *Objektiv* (客観事態) 論などを通じて論じられる。そのことをつうじてまた、フッサールの営みが「命題自体」と「事態」の両カテゴリーをともに保持しようと試みたものとして、位置づけられる。

第2部「モメントと全体 - 部分の理論」では、現代オントロジーが「トロープ」と呼ぶ個別的な性質をめぐる諸問題が概観されたあと、それと関わるブレンターノの「分離可能性／不可能性」、シュトゥンプフの「独立的／非独立的の内容」の理論が検討される。そしてフッサールの『論理学研究』第三研究の「モメント」および「基づけ」の理論の射程が、上述の区別を心的領域から対象一般の領域に拡張したものとして、明らかにされる。

第3部「非存在者の理論としての対象論」では、マイノングの「対象論」という特異な存在論の意味と射程が、現代オントロジーの観点から明らかにされる。まず「非存在者」の概念をめぐる諸論点が指摘されたあと、ブレンターノの内在的な志向性理論が、トワルドフスキを通じていかにして「非存在者」の理論へと転回しえたのかが解明され、さらにそこにボルツァーノの「表象自体」の理論が関わっていたことも指摘される。その上でマイノングの対象論が現代において持ちうる可能性が見定められる。

最後に位置する補論「ボルツァーノからフッサールへ：『学問論』と『論理学研究』第四研究」では、フッサールの『論理学研究』第四研究をボルツァーノ論理学への徹底した応答とみる新しい解釈が呈示され、それがボルツァーノとブレンターノとを「総合」する「オーストリア哲学」の体現となっていることが説かれる。

以上のように本論文は、これまでほとんど研究がなされてこなかった「オーストリア哲学」の哲学的的意義を明らかにし、現代哲学における可能性を探ったきわめて意欲的かつ刺激的な労作である。メレオロジーとそれを記述する論理との関係や、非存在者と *Truthmaker* 理論との関係など、確かに本論文には議論が十分尽くされていない点も認められはする。しかし先行研究の空隙を埋め、現代哲学における現象学と分析哲学とがもともと「地続き」であったことや、現代オントロジー理論との関連を明らかにした功績は高く評価される。よって、本論文は博士(文学)の学位を授与するに十分値すると判断される。